

学位論文要旨

大学生における関係的自己の可変性に関する 風景構成法を用いた検討

広島大学大学院教育学研究科
教育人間科学専攻

渋川 瑠衣

目 次

第 1 章 本研究の背景と目的

第 1 節 大学生の自己形成と自己の可変性

第 2 節 関係的自己の可変性に関する研究の動向と課題

第 3 節 風景構成法を用いて関係的自己の可変性を捉える試み

第 4 節 本研究の目的

第 2 章 大学生における関係的自己の可変性の心理的特徴

第 1 節 関係的自己の可変性と心理社会的適応との関連 (研究 1-1)

第 2 節 関係的自己の可変性と一体性・分離性との関連 (研究 1-2)

第 3 章 風景構成法からみた関係的自己の可変性

第 1 節 風景構成法に表現される大学生の心理的特徴 (研究 2-1)

第 2 節 関係的自己の可変性 3 群における自己統合の様相 (研究 2-2)

第 3 節 関係的自己の可変性 3 群の心理的特徴 (研究 2-3)

第 4 章 総合考察

第 1 節 本研究の成果

第 2 節 本研究の限界と今後の課題

引用文献

第1章 本研究の背景と目的

第1節 大学生の自己形成と自己の可変性

人は対人関係に応じて様々に自己を変化させ、それに応じて多様な自己を認知している。大学生が位置する青年期後期は、内的に形成された多様な自己を主体的に再構成する自己形成の時期とされる。対人関係に応じて可変的な自己を体験することは、新たな自己を見出す契機であり、自己形成を促すが（広瀬，1989）、一方で、統一した自己認識を阻害し、葛藤を生じさせる（Harter & Monsour, 1992）。このように自己の可変性体験は自己形成において多義的な意味を持つが、大学生自身にとって自己の可変性がどのように体験され、どのように自己形成と関連するのかはまだ十分に検討されていないことが指摘されている（田中，2010）。そこで本研究では様々な人々との関わりの中で、主観的に体験される自己側面や自己呈示のあり方を関係的自己と定義し（佐久間・無藤，2003）、関係的自己の可変性と自己形成との関連を検討する。

第2節 関係的自己の可変性に関する研究の動向と課題

関係的自己の可変性と適応との関連については、適応的とする知見がある一方で（Linville, 1987）、不適応的とする知見もあり（Donahue, Robins, Roberts, & John, 1993）、一貫した結果が得られていない。このような結果が生じた理由として、従来の研究では個人の変化に対する意味づけや自覚などの主観的側面が検討されていなかった点が挙げられ、この点に注目した研究が散見されている（佐久間・無藤, 2003; 田島, 2010）。佐久間・無藤（2003）は、先行研究で扱われてきた変化の程度に加え、自己を変化させる動機や変化に対する本人の評価から、関係的自己の可変性体験と自尊感情との関連を検討した。その結果、変化に対する動機には相手との関係を保つために自己を変化させる「関係維持」、意識せず、

自然に変化する「自然・無意識」、相手に対して自分の嫌な部分を隠すために変化させる「演技隠蔽」、立場や親密度から変化する「関係の質」があり、演技隠蔽が高い人や自己の可変性をネガティブに感じている人ほど自尊感情が低いこと、また、その傾向は女性の方が強いことを示した。さらに、自己の可変性をネガティブに捉え、かつ意識的に自己を変化させている場合はより不適応状態に至りやすい可能性を指摘しているが(佐久間, 2006)、理論的考察に留まり実証的には検討されていない。

近年、学生相談などの心理臨床場面では対人場面における不安や葛藤を言語化して意識的に対処するのではなく、相手に応じて異なる自己へ無意識的に変化することで適応している大学生が注目されている(成田, 2006)。このような学生は不安を感じていても表面上は適応しているため、支援の対象になりにくい(桐山, 2010)。無意識的な可変性と解離傾向との関連を指摘する実証研究はあるが(安達, 2012)、支援の必要性を指摘する臨床知見に比べてまだ少ない。臨床知見を踏まえると、関係的自己の可変性と適応との関連は意識的側面だけでなく、無意識的な可変性体験も合わせて検討する必要がある。また、自己形成の時期にある大学生の支援を考える上で、単に自己形成ができていないか否かだけでなく、可変的な自己がどのように統合されていくかにも注目する必要がある。

第3節 風景構成法を用いて関係的自己の可変性を捉える試み

心理臨床場面では個人の特徴をより多角的に理解するために、無意識的側面が表現されやすい描画法を用いることがある。風景構成法(The Landscape Montage Technique: LMT)は、枠づけされた画用紙に教示に従って10個のアイテムを描き込んで彩色を行い、最終的に一つの風景として完成させる描画法である。LMTは他者との関係性が表れやすく、描かれた風景全体に全体としての自己像、個々のアイテムに自己の諸側面が表現

され、描画全体の構成と描画特徴から主に理解される (皆藤, 1994)。また、継時的な教示法が生じさせる描画体験により、描画構成の仕方には自己側面の時間的・空間的な統合の様相が表れるとされている (高石, 1996)。また、LMTの描画体験と自己形成のプロセスが関連しているという指摘があることから (渡部, 2005)、LMTは関係的自己の可変性の特徴と自己形成の様相を捉える上で有用な技法であると考えられる。しかし、関係的自己の可変性とLMTとの関連を検討した研究はまだ見られない。

第4節 本研究の目的

本研究では、大学生の自己形成について関係的自己の可変性体験に着目して検討を行う。まず、研究1において、大学生の関係的自己の可変性体験を類型化し、各群の心理社会的適応度と自己規定の特徴を明らかにする。研究2では、関係的自己の可変性体験と自己側面の統合の様相や、可変性体験に特有な心理的特徴について、LMTを用いて検討する。

第2章 大学生における関係的自己の可変性の心理的特徴

第1節 関係的自己の可変性と心理社会的適応との関連 (研究1-1)

1. 目的

関係的自己の可変性と心理社会的適応との関連を検討するため、関係的自己の可変性を測定する尺度を用いて大学生を分類し、精神的健康と、大学生の心理社会的適応を考える上で重要な自我同一性 (谷, 2001) の観点から各群の特徴を明らかにする。

2. 方法

分析対象者 大学生 315名 (男性 175名, 女性 140名)。平均年齢は男性 20.5歳 ($SD=1.21$), 女性 20.6歳 ($SD=1.00$)。 **調査方法** 集団法による質問紙調査。 **質問紙の構成** (1) 関係的自己の可変性 (以下, 関係的自己

3 指標)：①変化程度 (佐久間・無藤, 2003) (1 項目, 6 件法)。②変化違和感 (1 項目, 6 件法)。③変化動機尺度 (佐久間・無藤, 2003) 「関係維持」, 「自然・無意識」, 「演技隠蔽」, 「関係の質」 (26 項目,

Table 1
男女別の平均値 (SD) と t 検定結果および相関分析結果

	α 係数	男性	女性	t 値
変化程度	-	4.38 (1.11)	4.59 (0.89)	-1.81 †
変化違和感	-	2.91 (1.12)	3.08 (1.05)	-1.34
変化動機				
関係維持	.86	3.35 (0.81)	3.47 (0.81)	-1.34
自然・無意識	.91	3.53 (0.90)	4.00 (0.79)	-4.99 **
演技隠蔽	.80	3.21 (0.71)	3.37 (0.75)	-2.02 *
関係の質	.71	4.08 (0.68)	4.18 (0.56)	-1.43

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

5 件法)。(2) 精神的健康：①相対的幸福感尺度 (遠藤, 1997) (1 項目, 7 件法)。②自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) (10 項目, 5 件法)。③改訂版大学生用ストレス反応尺度 (尾関, 1993) の「抑うつ」, 「不安」を使用 (各 5 項目, 4 件法)。④日本語版ポジティブ感情・ネガティブ感情尺度 (佐藤・安田, 2001) (各 8 項目, 6 件法)。(3) 自我同一性：多次元的自我同一性尺度 (谷, 2001) 「自己の斉一性・連続性」, 「対自的同一性」, 「対他的同一性」, 「心理社会的同一性」 (20 項目, 7 件法)。

3. 結果と考察

关系的自己 3 指標の得点で性差が認められたため (Table 1), 以後の分析は男女別に行うこととした。次に, 关系的自己の可変性の体験パターンを調べるために, 关系的自己 3 指標の標準化得点を用いてクラスタ分析 (Ward 法, 平方ユークリッド距離) を行った。その結果 (Figure 1), 男性では, 関係に応じて自己が変化しないと感じている「変化否定群」,

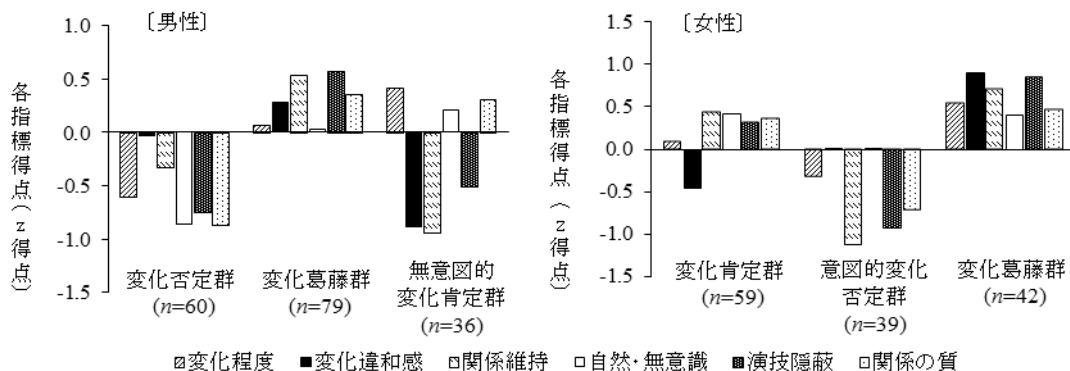


Figure 1. 男女別のクラスタ分析結果

Table 2
 関係的自己の可変性3群における各尺度得点の平均値 (SD) と1要因分散分析結果

α 係数	男性			F 値 多重比較結果	女性			F 値 多重比較結果	
	CL1	CL2	CL3		CL1	CL2	CL3		
	変化否定 群	無意図変 化肯定群	変化葛藤 群		意図的変 化否定群	変化肯定 群	変化葛藤 群		
精神的健康									
幸福感	-	4.8 (1.1)	4.9 (1.4)	4.7 (.9)	.27	5.1 (.6)	4.7 (.7)	4.5 (.9)	3.64* CL3<1
自尊感情	.85	30.9 (6.5)	29.7 (6.8)	27.9 (7.2)	3.36* CL3<1	29.2 (5.7)	27.6 (5.5)	26.8 (6.0)	1.90
抑うつ	.88	9.2 (4.0)	9.7 (4.0)	11.4 (4.2)	3.96* CL1<3	11.6 (3.4)	9.9 (3.7)	12.0 (3.6)	2.58† CL2<3
不安	.85	9.2 (3.5)	10.4 (3.7)	11.3 (4.0)	3.81* CL1<3	9.6 (3.1)	10.8 (3.6)	12.1 (3.1)	2.86† CL1<3
ポジティブ感情	.87	22.8 (9.0)	22.4 (6.6)	22.8 (8.9)	.02	22.2 (7.5)	20.0 (5.9)	21.8 (6.1)	.80
ネガティブ感情	.88	17.5 (6.8)	20.1 (9.4)	23.0 (9.1)	5.34* CL1<3	19.5 (6.0)	18.7 (6.8)	25.4 (7.2)	6.71** CL1,2<3
自我同一性									
自己の斉一性・連続性	.88	25.9 (7.8)	24.2 (7.9)	21.9 (7.6)	3.46* CL3<1	24.3 (5.0)	24.1 (5.1)	22.5 (6.3)	.70
対自的同一性	.86	23.5 (7.3)	24.2 (6.1)	21.3 (5.9)	1.48	19.2 (6.1)	20.8 (3.9)	18.2 (5.1)	1.68
対他的同一性	.83	20.3 (5.9)	24.2 (5.2)	18.9 (5.4)	.87	22.1 (5.1)	19.5 (4.9)	17.2 (5.1)	4.65* CL3<1
心理社会的同一性	.85	24.1 (6.3)	24.2 (5.8)	21.9 (5.4)	1.70	23.7 (3.7)	21.0 (4.7)	19.6 (3.9)	4.86* CL2,3<1

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

無意図的に自己が変化し、違和感を感じていない「無意図的变化肯定群」、自己を変化させる動機づけは高いが、違和感も感じている「変化葛藤群」が抽出された。女性では、関係に応じて意図的に自己が変化しないと感じている「意図的变化否定群」、自己の変化に違和感を感じていない「変化肯定群」、ほぼ全ての指標得点が高い「変化葛藤群」が見出された。さらに、可変性の体験パターンによって自覚的な適応度が異なるかを調べるために、関係的自己の可変性体験3群を独立変数、精神的健康及び自我同一性の尺度得点を従属変数とした1要因分散分析を行った (Table 2)。その結果、男性では、変化否定群が変化葛藤群よりも精神的健康度と自我同一性得点が高く、女性では意図的变化否定群が他の2群よりも得点が高かった。変化肯定群と変化葛藤群はともに関係に応じた意識的、無意識的な自己変化の自覚が高い群であるが、違和感が低い変化肯定群の方が精神的健康度が高かった。また、意図的变化否定群に比べて変化肯定群と変化葛藤群で心理社会的同一性が低かったことから、変化に対する動機づけの高さを自覚していることが同一性の低さと関連していることが推察された。以上より、自覚的な適応度は可変性に対して否定的な群で高く、葛藤を感じている群で低いことが示された。男女ともに関係

に応じて自己を変化させ、それに対して違和感を感じている変化葛藤群が最も適応度が低かったことから、佐久間 (2006) が支持されたが、他にも異なる可変性の体験パターンが見出され、可変性の体験の仕方によって適応度に違いがあることが示された。

第 2 節 関係的自己の可変性と一体性・分離性との関連 (研究 1-2)

1. 目的

自己規定の仕方は自己形成に関連し (西川, 1993), 関係の中で自己を捉える人ほど可変性が生じやすいという指摘もある (長谷川, 2005)。そこで、関係的自己の可変性体験と自己形成との関連を調べるため、自己を他者との関係の中で規定するのか、区別して規定するのかという自己規定の観点から関係的自己の可変性体験 3 群の特徴を検討する。

2. 方法

分析対象者及び手続き 研究 1-1 と同様。**質問紙の構成** (1) 関係的自己 3 指標：研究 1-1 と同様。(2) 一体性，分離性：山本 (1989) の一体的自己尺度 (「他者欲求への敏感さとその充足の優先」, 「社会的能動性」, 「共感・融合能力」, 19 項目, 4 件法) と分離的自己尺度 (「自己主張の強さ」, 「他者・状況からの分離性」, 「自由な自己表出」, 12 項目, 4 件法)。

3. 結果と考察

可変性体験 3 群を独立変数，一体的・分離的自己尺度を従属変数とした 1 要因分散分析を行った結果 (Table 3), 男性では一体性・分離性の両方で主効果が示された。多重比較の結果 (Tukey の HSD 法), 変化否定群は一体性，分離性がともに高く，一体性が低く，分離性が高い無意図的变化肯定群のように他者の意向や主体性を否定し，自己の自律的側面のみで自己規定を行うのではなく，他者の意向を受け入れながらも，それが互いのものとして区別し主体的に自己規定を行う傾向が示された。こ

Table 3
男女別のクラスタ3群における一体性・分離性尺度得点の平均値 (SD) と1要因分散分析結果

	α 係数	男性			F 値 多重比較結果	女性			F 値 多重比較結果
		CL1	CL2	CL3		CL1	CL2	CL3	
		変化否定 群	無意図変 化肯定群	変化葛藤 群		意図的変 化否定群	変化肯定 群	変化葛藤 群	
一体的自己尺度合計	.81	53.7 (8.3)	49.9 (6.9)	52.9 (6.4)	3.40 * CL2<1	53.8 (8.4)	53.9 (7.0)	53.2 (7.2)	.14
他者欲求の優先 ^{注1}	.78	24.5 (4.4)	22.4 (4.9)	24.5 (3.6)	3.59 * CL2<1,3	24.3 (5.0)	25.0 (4.2)	25.0 (3.6)	.39
社会的能動性	.70	11.5 (2.6)	11.0 (2.7)	10.6 (2.6)	1.70	10.4 (2.2)	10.6 (2.5)	10.0 (2.5)	.76
共感・融合能力	.64	17.8 (3.4)	16.5 (2.8)	17.9 (2.6)	2.94 † CL2<3	19.1 (3.5)	18.4 (2.3)	18.1 (2.6)	1.29
分離的自己尺度合計	.79	27.6 (5.1)	27.9 (5.7)	24.2 (4.3)	11.08 ** CL3<1,2	26.3 (5.7)	24.8 (4.2)	22.2 (4.2)	7.75 * CL3<1,2
自己主張の強さ	.75	14.5 (3.2)	14.4 (3.3)	12.8 (2.7)	6.44 ** CL3<1,2	13.5 (3.3)	13.3 (2.6)	12.1 (2.6)	2.97 * CL3<1
他者からの分離性 ^{注2}	.63	8.2 (2.4)	8.8 (2.8)	7.3 (1.8)	6.22 ** CL3<1,2	7.9 (2.0)	7.0 (1.9)	6.3 (1.7)	7.66 ** CL3<1
自由な自己表出	.63	4.9 (1.3)	4.7 (1.7)	4.1 (1.2)	6.86 ** CL3<1,2	4.8 (1.4)	4.4 (1.3)	3.8 (1.3)	6.18 ** CL3<1

注1) 他者欲求への敏感さと充足の優先, 注2) 他者・状況からの分離性

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

のような自己規定がどのような関係でも同じ自己であり、変化しないという体験を生じさせている可能性が考えられた。また、変化葛藤群は一体性が高く、分離性が低いことから自他を区別せず他者の意向を自己のものとして受け入れるため自己の主体性が揺らぎやすく、これが変化に対する違和感として体験されている可能性が考えられた。一方、女性では分離性でのみ主効果が認められ、変化葛藤群が他の群に比べて低かった。山本 (1989) によると女性は一体性の高さが基盤にあり、青年期における分離性の上昇を機に自己形成が行われていく。本研究でも女性では群間での有意差は認められず、他者欲求の優先や共感・融合能力といった一体性得点が男性に比べて高かった。このことから、分離性が高い意図的変化否定群は互いの主体性を認めた上で主体的に自己規定を行う傾向が示され、分離性の低い変化葛藤群は相手の主体性を受け入れることで自己規定を行っている可能性が示された。また、変化葛藤群と同様に自己変化の自覚が高い変化肯定群は変化葛藤群に比べて分離性が高く、この自他の区別の高さが違和感の低さと関連していると考えられた。

第3章 風景構成法からみた関係的自己の可変性

第1節 風景構成法に表現される大学生の心理的特徴 (研究 2-1)

1. 目的

LMT を集団施行した際に表現されやすい大学生の心理的特徴を、描画構成とアイテムの描画特徴から明らかにする。

2. 方法

分析対象者 研究 1 及び追加調査で参加協力が得られた大学生 217 名 (男性 99 名, 女性 118 名)。平均年齢は男性 19.9 歳 ($SD=1.47$), 女性 19.7 歳 ($SD=1.14$)。 **調査内容** LMT: 枠づけを施した A4 画用紙, 黒サインペン, クレヨン。 **手続き** 集団法。 教示は「これから風景の絵を一枚描いていただきます。描いてもらうものを一つずつ言いますので, それを一つずつペンでこの枠の中に描いていって, 最後に一つの風景になるように描いて下さい」。 **分類方法** ①描画構成 構成型 (高石, 1996) 及び VI-型 (松下, 2001) (Table 4)。出現度数の少ない IV 型以下をまとめ, 5 カテゴリとして分析を行った。構成型の分類は臨床心理学を専攻する大学院生 5 名で行った。②描画特徴 皆藤 (1994) をもとに作成した 30 項目。

Table 4
構成型の分類基準 (高石, 1996 及び 松下, 2001 をもとに作成)

I 羅列型	全要素バラバラで, 全く構成を欠く。
II 部分的結合型	大景要素 (川・山・田・道) 同士はバラバラであるが, 大景要素と他の要素 (中景要素: 家・木・人, 小景要素: 花・動物・石) とが一部結びつけられている。基底線の導入が認められることもある。
III 平面的部分的統合型	大景要素と他の要素の結びつきに加えて, 大景要素同士の構成が行われている。しかし, それは部分的な統合にとどまり, 「空飛ぶ川」, 「空飛ぶ道」などの表現が見られる。彩色されていない空間が多く残り, 宙に浮いた感じが特徴的である。視点は不定で, 複数の基底線が使用されている。遠近・立体表現はない。
IV 平面的統合型	視点は不定多数であるが, 視向 (視点のそそがれる方向) はおおむね正面の一方向に定まり, 全ての要素が一応のまとまりをもって統合されている。しかし, 立体表現は見られず, 全体として平面的で貼りついたような感じが特徴的である。奥行は上下関係として表現される。
V 立体的部分的統合型	視向が正面と真上 (あるいは斜め上) の 2 点に分かれ, 部分的には遠近法を取り入れた立体的表現が見られる。しかし, 大景要素間でも立体表現と平面的表現が混在し, 全体としてはまとまりを欠く分裂した構成。「空からの川」など, 画用紙を上下に貫く川の表現が特徴的である。鳥瞰図や展開図的表現が見られることもある。
VI- (マイナス) 型	ほぼ一方向に定まった視向から遠近的・立体的表現で風景が描かれているが, 一部に統合しきれない《空間》あるいは《微妙な空間のズレ・分裂》を残す。a) 左右の地平線がずれている, b) 近景は立体的表現だが遠景になるに従い平面的表現が用いられる, などが含まれる。後述の VI 型を細分化したものが, より未統合箇所が大きいとして VI 型の前段階に位置づけられている。
VI 立体的統合型	視点・視向とも, 斜め上方あるいは正面の 1 点におおむね定まり, 全体が遠近・立体感のあるまとまった構成されている。しかし, 「平面的な田」, 「傾いた家」など一部に統合しきれない要素を残している。
VII 完全統合型	一つの視点から, 全体が遠近感を持って, 立体的に統合されている。

Table 5
男女別の構成型分類及び正確率検定結果

	男性	女性	検定結果
IV型以下	16 (16.2)	11 (9.3)	<i>n.s.</i>
V型	14 (14.1)	13 (11.0)	<i>n.s.</i>
VI-型	27 (27.3)	38 (32.2)	<i>n.s.</i>
VI型	29 (29.3)	39 (33.1)	<i>n.s.</i>
VII型	13 (13.1)	17 (14.4)	<i>n.s.</i>

※()内は性別における出現率(%)

Table 6
男女別の描画特徴の出現度数と正確率検定結果

	男性	女性	検定結果
空間の無彩色	59 (59.0)	53 (44.9)	*
アイテムの無彩色	57 (57.6)	50 (42.4)	*
混色	51 (51.5)	84 (71.2)	**
右上→左下の川	66 (66.7)	94 (79.7)	*
蛇行の川	37 (37.4)	30 (25.4)	†
田の面積大	18 (18.4)	35 (29.7)	†

※()内は性別における出現率(%) † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

3. 結果と考察

構成型の分布を示した (Table 5)。大学生の場合、立体・遠近表現のないIV型以下は少なく (松下, 2001), 集団法での出現率は 1.3% (高石, 1996) から 11.8% (隈元, 2008) と低い値で分布するとされる。本研究でもIV型以下は全体で 12.4%と比較的少なかったことから、集団法による影響を受けている可能性が考えられた。また、LMTの性差について検討したところ、構成型の分布では性差が認められず、描画特徴からは空間やアイテムの無彩色、混色など彩色に関する項目で性差が示された (Table 6)。彩色は描き手の情動を表すとされ (中井, 1996)、女性の方が自己像や自分の体験を感情と関連づけて表す傾向が高いことが推察された。

第2節 関係的自己の可変性3群における自己統合の様相 (研究2-2)

1. 目的

関係的自己の可変性の体験パターンによって自己側面の統合の仕方に質的な違いが見られるかどうかを、関係的自己の可変性体験3群とLMTの描画構成との関連から検討する。

2. 方法

分析対象者、調査内容及び分類方法 研究2-1と同様。

3. 結果と考察

各構成型における可変性体験3群の出現度数の偏りを χ^2 検定で分析した (Table 7)。その結果、VII型は男性の変化否定群、女性の変化肯定群に

Table 7
風景構成法の各構成型の出現度数 (%) と χ^2 検定結果

	男性			χ^2 値	女性			χ^2 値
	CL1 変化否定群	CL2 無意図的変化 肯定群	CL3 変化葛藤群		CL1 意図的変化 否定群	CL2 変化肯定群	CL3 変化葛藤群	
IV型以下	4 (14.3)	1 (3.4)	11 (26.2)	6.65 * CL2<3	4 (13.8)	3 (8.3)	4 (7.5)	.92
V型	5 (17.9)	6 (20.7)	3 (7.1)	3.04	3 (10.3)	2 (5.6)	8 (15.1)	2.01
VI-型	4 (14.3)	7 (24.1)	16 (38.1)	5.00 † CL1,2<3	14 (48.3)	9 (25.0)	15 (28.3)	4.66 † CL2<1
VI型	8 (28.6)	13 (44.8)	8 (13.0)	5.51 † CL3<2	4 (13.8)	13 (36.1)	22 (41.5)	7.44 * CL1,2<3
VII型	7 (25.0)	2 (6.9)	4 (9.5)	4.93 † CL2,3<1	4 (13.8)	9 (25.0)	4 (7.5)	5.31 † CL3<2

※括弧内は群内における出現率 (%)

† $p < .10$, * $p < .05$

多い傾向が示され、一視点から全てのアイテムが立体的、統合的に描かれていた。立体表現は各アイテムとの関係に注目しながら風景全体をメタ的な視点で捉えられる自我の強さと関連しており (高石, 1996), 関係の中で体験される自己を対象化し、時間的・空間的な一貫性をもって統合していることが推察された。VI型は男性の無意図的変化肯定群, 女性の変化葛藤群に多い傾向が示された。男性の場合, 家族や内的な拠り所を表す「家」(山中, 1984) の未統合が多く (群内のVI型中 46.2%), この内的な拠り所となる関係の位置づけ難さが他者性を排除した分離性の高さや, 変化に対する意図的な動機の低さと関連していると考えられた。また, 女性の変化葛藤群では社会との関わりを表す「田」(山中, 1984) と「家」の未統合が多く (群内のVI型中, 各 31.8%, 27.3%), 両者の統合出来なさが変化に対する意識的な葛藤と関連している可能性が考えられた。また, IV型以下とVI-型は男性の変化葛藤群に多い傾向が示され, 各アイテムが異なる視点からバラバラに描かれ, 各場面での自己が場当たりに体験されている人と (IV型以下), 一つの風景の中に複数の空間が併存して描かれ, ある程度まとまりをもった異なる自己像がそれぞれ異質なまま自己の一部として体験されている人と (VI-型), 同じ群の中でも差があることが示された。VI-型は女性の意図的変化否定群でも多い傾向が示された。以上より, 可変性体験によって空間構成の仕方に違いが見ら

れることが示され、LMT を用いることで各群の自己統合における性質上の違いや、可変性体験の質的な違いが明らかになる可能性が示された。

第3節 関係的自己の可変性3群の心理的特徴 (研究2-3)

1. 目的

関係的自己の可変性体験3群に特有の心理的特徴をLMTの描画指標から検討する。

2. 方法

分析対象者、調査内容及び分類方法 研究2-1と同様。

3. 結果と考察

各描画指標における可変性体験3群の出現度数の偏りを検討するために χ^2 検定を行った (Table 8)。その結果、男性では「川」や「田」、「道」の線遠近法表現で有意差が示されやすく、いずれも無意図的变化肯定群が他の群に比べて多かった。遠近法表現は心理的距離や自己の体験を対象化して捉える傾向を表す (高石, 1996)。そのため、男性の場合は他者や自分の体験と心理的距離をとり、対象化して捉える傾向の強さが、可変性に対する肯定的傾向と関連することが推察された。しかし、無意図的变化肯定群は遠近感を強調した表現が多く、周囲の環境への違和感や疎外感を感じている可能性 (三上, 1995) も考えられた。一方、女性では「ドア」や「橋」など教示以外に独自で描かれたアイテムで有意差が示されやすく、意図的变化否定群より変化肯定群で多かった。「ドア」や「橋」は他者との交流や繋がりを表すことから (三上, 1995)、女性の場合、可変性への肯定的傾向には他者との繋がりへの関心が関連していることが示唆された。また、女性の変化葛藤群では「空間の無彩色」で枠線に沿って内側を彩色せずに残すことで二重に枠を描いた表現 (14%) など、空間的に守られた表現 (皆藤, 1994) が多く認められた。

Table 8
 関係的自己の可変性3群における描画指標の出現度数 (%) と χ^2 検定結果

	男性			χ^2 値 残差分析結果	女性			χ^2 値 残差分析結果
	CL1 変化否定 群	CL2 無意図変 化肯定群	CL3 変化葛藤 群		CL1 意図的変 化否定群	CL2 変化肯定 群	CL3 変化葛藤 群	
空間の無彩色	17 (60.7)	15 (51.7)	27 (64.3)	1.14	14 (48.3)	10 (27.8)	29 (54.7)	6.46 * CL2<3
蛇行の川	14 (50.0)	6 (20.7)	17 (40.5)	5.53 † CL2<1	2 (6.9)	13 (36.1)	15 (28.3)	7.65 * CL1<2
線遠近法の川	8 (28.6)	18 (62.1)	16 (38.1)	7.10 * CL1<2	14 (48.3)	19 (52.8)	25 (47.2)	.28
川の面積大	11 (39.3)	12 (41.4)	13 (31.0)	.95	14 (48.3)	8 (22.2)	12 (22.6)	7.10 * CL2,3<1
川と道の並行	17 (60.7)	20 (69.0)	26 (61.9)	.51	25 (86.2)	26 (72.2)	31 (58.5)	6.97 * CL3<1
川中の石	8 (28.6)	15 (51.7)	9 (21.4)	7.45 * CL3<2	13 (44.8)	10 (27.8)	16 (30.2)	2.47
線遠近法の田	18 (64.3)	20 (69.0)	19 (45.2)	4.67 † CL3<2	18 (62.1)	25 (69.4)	36 (67.9)	.44
田の中の人	8 (28.6)	8 (27.6)	15 (35.7)	6.60	5 (17.2)	5 (13.9)	18 (34.0)	6.69 * CL2<3
線遠近法の道	17 (60.7)	18 (62.1)	13 (31.0)	8.99 * CL3<1,2	16 (55.2)	18 (50.0)	28 (52.8)	.18
平面表現の家	13 (46.4)	19 (65.5)	27 (64.3)	2.82	24 (82.8)	19 (54.1)	34 (64.2)	6.42 * CL2<1
ドア	18 (64.3)	17 (58.6)	24 (57.1)	.37	13 (44.8)	27 (75.0)	31 (58.5)	6.21 * CL1<2
家付近の人	13 (46.4)	13 (44.8)	15 (35.7)	.99	7 (24.1)	15 (41.7)	28 (52.8)	6.33 * CL1<3
橋	6 (21.4)	9 (31.0)	5 (11.9)	3.93	1 (3.4)	10 (27.8)	10 (18.9)	6.57 * CL1<2
太陽	9 (32.1)	8 (27.6)	7 (16.7)	2.44	14 (48.3)	9 (25.0)	10 (18.9)	8.27 * CL3<1

※() 内は群内における出現率 (%)

† $p < .10$, * $p < .05$

第4章 総合考察

第1節 本研究の成果

研究1では、関係的自己の可変性の程度や動機、違和感の組み合わせから大学生を分類し、関係的自己の可変性の体験パターンには男女ともに3つの群が存在することが明らかになった。また、関連要因を検討することで、可変性に対して否定的な群で自覚的な適応度が高く、葛藤を感じている群で適応度が低いことが示され、自己規定の仕方によって可変性の体験のされ方や適応度の自覚が異なる可能性が示唆された。研究2では、研究1で見出された関係的自己の可変性体験3群の心理的特徴について、LMTの描画構成と描画特徴の観点から検討した。LMTを用いることで、可変的な自己をどのように統合していくかについて、一定の示唆を得ることが出来た。男性の変化葛藤群のように質問紙では同じ可変性の体験パターンを示す群に属していても、LMTでは質的に異なる特徴を示す群も見出されたことは、LMTを用いた本研究の成果であると

考えられる。また、可変性に対する葛藤の様相が LMT のアイテムや空間の未統合と関連する可能性が示され、構成の仕方や未統合箇所への対処の仕方を検討することで、違和感に対する対処方法や自己形成における困難さが読み取れる可能性が示された。

第 2 節 本研究の限界と今後の課題

研究 1 で見出された関係的自己の可変性体験 3 群は対象人数が限定されている。そのため、サンプルサイズを増やし、一般化可能性を検証する必要がある。研究 2 では LMT を集団法で行ったため、実際の臨床場面とは検査者と描き手の関係性が異なり、表現される内容が簡素化されやすいなど質的に差が生じた可能性がある。また、描画法は結果の客観性を示し難く、読み取りも多義的になるなどの限界がある。客観性を担保し、臨床場面に即した知見とするために、今後は客観的指標や事例研究的手法を用いて結果の検証を行うとともに、個別法で実施した LMT データとの比較を行うなど検討を加える必要がある。

引用文献

- 安達知郎 (2012). 自己の変動性, 多面性と解離との関連——自己ゆらぎ尺度による検討—— 催眠学研究, **54**, 21-31.
- Donahue, E. M., Robins, R. W., Roberts, B. W., & John, O. P. (1993). The divided self: Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 834-846.
- 遠藤由美 (1997). 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下 心理学研究, **68**, 387-395.
- Harter, S., & Monsour, A. (1992). Developmental analysis of conflict caused

by opposing attributes in the adolescent self-portrait. *Developmental Psychology*, **28**, 251-260.

長谷川直宏 (2005). 自己呈示行動における文化的自己観の影響 社会心理学研究, **21**, 44-52.

広瀬 隆 (1989). 青年期における自己の二面性について——同一性感覚との関連より—— 心理臨床学研究, **6**, 4-18.

皆藤 章 (1994). 風景構成法——その基礎と実践—— 誠信書房

桐山雅子 (2010). 現代の学生の心理的特徴 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 (編) 学生相談ハンドブック 学苑社 pp.30-34.

隈元みちる (2008). 風景構成法に表れるアレキシサイミアの特徴 生徒指導研究, **19**, 25-31.

Linville, P. W. (1987). Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 663-676.

松下姫歌 (2001). 風景構成法の構成のあり方を通して見た離人感の心的意味 箱庭療法学研究, **14**, 63-74.

三上直子 (1995). S-HTP 法——統合型 HTP 法の臨床的・発達のアプローチ—— 誠信書房

中井久夫 (1996). 風景構成法 山中康裕 (編) 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社 pp.3-26.

成田善弘 (2006). 伝統的精神療法は近年の青年期精神病理の変化に対応して生き残ることができるか? 臨床精神病理, **27**, 146-152.

西川隆蔵 (1993). 大学生における自己の 2 面性の研究——自我同一性, 自己評価的意識との関係—— 学生相談研究, **14**, 1-9.

尾関友佳子 (1993). 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂——トランス

アクションな分析に向けて—— 久留米大学大学院比較文化研究
科年報, **1**, 95-114.

佐久間路子 (2006). 幼児期から青年期にかけての关系的自己の発達 風
間書房

佐久間路子・無藤 隆 (2003). 大学生における关系的自己の可変性と自
尊感情との関連 教育心理学研究, **51**, 33-42.

佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, **9**,
138-139.

田島 司 (2010). 自己概念の多面性と精神的健康との関連——女子大学
生を対象とした調査—— 心理学研究, **81**, 523-538.

高石恭子 (1996). 風景構成法における構成型の検討 山中康裕 (編) 風
景構成法その後の発展 岩崎学術出版社 pp.239-264.

田中崇恵 (2010). パーソナリティにおける揺らぎの様相 心理臨床学研
究, **28**, 324-335.

谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同
一性尺度 (MEIS) の作成—— 教育心理学研究, **49**, 265-273.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の
構造 教育心理学研究, **30**, 64-48.

山本里花 (1989). 「自己」の二面性に関する研究——青年期から成人期
にかけての発達傾向と性差の検討—— 教育心理学研究, **37**,
302-311.

山中康裕 (1984). 〈風景構成法〉事始め 山中康裕 (編) 中井久夫著作集
別巻 H.NAKAI 風景構成法 岩崎学術出版社 pp.1-36.

渡部未沙 (2005). 継続面接における風景構成法の作品変化について——
大学生の複数事例における特徴—— 心理臨床学研究, **22**, 648-658.

